

山形中央高校 校歌



山形中央高等学校 学校だより「大空」平成 30 年度第 4 号に「男子三段跳 全国の頂点を掴む！！～2018 彩る感動 東海総体」に載っている、体育部長佐藤孝夫先生（陸上競技部顧問）の言葉を抜粋し、いよいよ始まる県高校総体（陸上競技 5 月 25 日～29 日！ バレーボール 5 月 28 日スタート！ サッカーは 5 月 29 日からスタート！）に向けた激励も込め、皆さんにご紹介させていただきます。

『・・・昨年の山形インターハイで入賞した生徒たちの目標は、当然のように三重インターハイでの「優勝」だった。そしてその目標は惜しいところでなかなか達成できなかったものの、最終日 5 日目にして松田基が成し遂げてくれた。では、松田の勝因は何だったのか。それは、昨年度 5 位の結果からの反省と準備だったと思う。・・・ 今回の優勝は、昨年の 5 位入賞という経験を踏まえて具体的な対策を図れたことが実を結んだ。また、昨年の秋に故障をして思うように跳躍が出来なかったことで、弱点だった股関節の可動範囲を大きくできたこともパフォーマンスの向上につながることが出来た。まさに「ピンチはチャンス」である。表彰式で、山形中央高校の校歌が流れる中、部旗掲揚がおこなわれた時は、感無量だった。本人の頑張りはもちろん、切磋琢磨した仲間たち、応援してくれたたくさんのみなさまに感謝感謝の気持ちでいっぱいになった。今回のインターハイでは、優勝 5 を目標にしていたため、それぞれ自分が部旗掲揚と校歌を流すことを合言葉にしていた。・・・ 今回の試合での経験をベースにして、一年後、三年後、五年後あたりに「今回の勝ち・成功・負け・失敗があったから強くなれた」と思えるように更なる飛躍を期待したい。』

「母校の校歌に誇りを持つ」という素晴らしい指導をされている佐藤孝夫先生（数々の全国トップレベルの選手を育成）と、母校に誇りを持ち、校歌を大事にされた先輩の快挙に、「全国で勝ち続ける風土」の教えがありました。

『賢者は歴史（先人）に学ぶ』という言葉があるように、先輩方の活躍を辿り、一つの分野を掘り下げ、「共通点と違い」を探しだすことが勝利への第一歩ではないでしょうか。

今回は、山形中央高校の校歌についてご紹介させていただきます。

第一体育館にある校歌が書かれた額は**本校を卒業された鈴木孝始さん（本校野球部前監督）の奥様が手書きで書かれたものです**。一文字、一文字心を込めて書かれた校歌の重み。校歌の価値は、在校生と卒業生、学校関係者の方々が一体となり「心をつにできる」ことにあります。個人主義が横行し、「心をつに」にして物事に取り組むことが少なくなった今であるがゆえに重要視される大切な歌だと思います。勝負に挑むにあたり、校歌を大声で歌えないのは問題外。（コロナ禍で難しいですが・・・）校歌を通じて育まれた感謝心や敬意などの心構えがなければ勝つ意味がありませんし、大切な方々と感動を共有することはできないと思います。人間は勝つという目標を達成しても、何のためにという目的意識がないと誇りを持つことはできません。母校の校歌に誇りが持てないと、常勝文化は根づかないでしょう。歌詞の意味について考えてみます。ここの意味づけに正しい答えはありませんが、何事においても自分なりの答えを出すことが大事だと思っています。メンタルコーチの松下信武先生は「メンタルを強くするためには、答えのないものに自ら答えを出して行動し、責任をとること」と教えてくれました。1番にある「さあ友よ真実をここに求めて」についてですが、「一人では何もできない」という真実にたどり着くために『謙虚な姿勢』を求めることが私の出した答えです。その『謙虚な姿勢』は**尊重の精神（respect）**であるともいえます。競技スポーツの成立に必要なことは何でしょうか。それはルール、審判、仲間、相手、場所の5つは間違いなく必要です。これが尊重の精神の前提となり、競技スポーツは「一人で出来るものではなく、他の存在があり始めて成り立つ」ものであるということになります。学校生活も同じです。自分一人では成り立たないということが分かれば、自然と他者を尊重する精神を持つことができるのではないかと思います。尊重の精神があれば環境や他人にいいわけをせず、自分のこととして考える習慣が身につくのではないのでしょうか。勝負に勝つためには、本人の血の滲むような努力はもちろんですが、多くの方々のご支援、ご協力が必要になります。卒業してからも母校の校歌は声高らかに、誇りを持って歌いたいものです。

